

スイーツを食べながら考える！

未来を創る臨床検査室 DX ～ Digital Solution が導く、一元管理と次世代ジェネラリスト育成の形 ～

◎町田 淳¹⁾神奈川県立循環器呼吸器病センター 検査科¹⁾

今日の医療機関では、少子高齢化の進展に伴い複数の併存疾患や希少疾患を有する患者が増加、検査技術の進歩により臨床検査データは年々増大し、その解釈や活用は高度化・複雑化している。

一方で、生産年齢人口の減少による人的リソース不足が深刻化しているが、医療分野は過去 20 年間にわたり実質 GDP は成長したがそれに伴って労働者数も増加しており、国の財政制度分科会においても労働投入によって需要を支えてきた産業構造が指摘されている。医療従事者需給に関する調査では、臨床検査需要は 2030 年代後半をピークに減少へ転じると予測される一方、臨床検査技師養成校数および国家試験合格者数は増加傾向にあり、加えて AI 等の技術革新も相まって、将来的な需給構造の変化が見込まれる。

このような環境変化の中、臨床検査室においては、DX（デジタルトランスフォーメーション）を活用した生産性向上と効率化を図るとともに、臨床検査技師には専門性の深化に加え、多領域を横断して活躍できる「次世代ジェネラリスト」として新たな臨床貢献と価値創出を実現していくことが求められている。

当院では、検体検査～輸血管理の複数分野を横断的に担う業務体制のため、人員の絶対的・相対的不足から教育時間の確保が困難となり、業務の属人化や新たな臨床貢献への取り組み不足が課題であった。

そこで、ロシュ社の Digital Solution 【BarcoCTRL】を導入し、検査室内全ての分析装置、HIS や LIS、輸血管理等の各種システム、顕微鏡画像情報、遠隔カメラ映像、Microsoft365 のクラウドストレージなどを集約し、一元管理する検査室体制を構築した。

これらにより、『労働投入量＝人員』の増加ではなく、『最適化と専門教育の相乗効果』による生産性の向上に取り組んだ。

これまで分野ごとに個別管理されていた情報を統合的に把握することで、迅速な意思決定や業務改善を可能とし、検査の質向上と効率化の両立に寄与している。

また、DX がもたらす価値は業務効率化だけではない。進捗状況や業務の可視化によってスタッフ間の意思疎通は的確になり、顕微鏡画像を活用した e ラーニングや多分野の情報を同時に参照して行うデータ判読のト

レーニングなど、【BarcoCTRL】を活用した教育環境の構築で、スペシャリストが持つノウハウを 1 対多数で共有することで、多領域を横断的に理解し活躍できる「次世代ジェネラリスト」の育成を効率的に行うことが可能となる。

また、多分野横断的なデータの一元管理により、従来のような検査項目単位での結果報告ではなく、患者の病態を包括的に把握した上で、追加検査の提案や診断支援に資する情報提供が可能となった。すなわち、単なる『検査数値の報告』から『臨床判断材料の提供』へと役割を拡大することで、新たな臨床検査技師の価値創出につながっている。

本講演では、当院における【BarcoCTRL】活用事例を紹介しながら、Digital Solution による検査室の一元管理の実際とその効果について報告する。また、DX 時代において急激な変化の過渡期にある臨床検査技師が専門職としてどのように価値を発揮していくべきかについて、次の時代の臨床検査技師像を参加者の皆様とともに考えたい。